鶏口牛後

要旨

戦国の世、超大国となった秦は絶えず他の諸侯を脅かしていた。そこで生き残りをかけた六国は、蘇秦の提唱する「合従策」に理解を示し同盟することとなる。その時、蘇秦が説得に用いた鄙諺が「鶏口牛後」であった。

構成

全一段落。

訓読と現代語訳

①秦人諸侯を恐喝して、地を割かんことを求む。②洛陽の人蘇秦なるもの有り。③秦の恵王に遊説して用ゐられず。④乃ち往きて燕の文侯に説き、趙と従親せしむ。⑤燕之に資し、以て趙に至らしむ。⑥粛侯に説きて曰はく、「諸侯の卒、秦に十倍す。力を并せて西に向かはば、秦必ず破れん。大王の為に計るに、六国従親して、以て秦を擯くるに若くは莫し。」と。⑦粛侯乃ち之に資し、以て諸侯に約せしむ。⑧蘇秦鄙諺を以て諸侯に説きて曰はく、「寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為ること無かれ。」と。⑨是に於いて六国従合す。

①秦王は諸侯をおどして、領土を割譲することを要求した。②（この頃）洛陽出身の人で蘇秦というものがいた。③（初めは）秦の恵王のところに行って（自らの策を）説いたが採用されなかった。④そこで（次に）燕の文侯のところに行って（自らの策を）説き（勧めて）、趙と南北に同盟を結ばせようとした。⑤燕（の文侯）は（その意見に賛成して）蘇秦に（遊説の）資金を与えて、趙に行かせた。⑥（蘇秦がその趙の）粛侯に説いて言った、「諸侯の兵士（の数）は、秦の十倍もおります。（諸侯が）力を合わせてもし西（の秦）に立ち向かったならば、秦はきっと破れるでしょう。大王様のために（策を）立ててみますと、六国が南北同盟を結んで、秦を（押し出して）のけ者にするのにまさるものはない（と思われます）。」と。⑦粛侯はそこで蘇秦に（六国連盟を成立させるのに必要な）資金を与え、諸侯に同盟を結ばせた。⑧蘇秦は（説得するときに）世間で言い習わされていることわざを引用して諸侯に説いて言った、「どちらかと言えば鶏のくちばしになっても、牛の尻になってはなりません。」と。⑨こうして六国は南北に同盟し（秦に対抗することとなった）。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「春秋戦国時代」「戦国の七雄」「諸子百家」の概略と「合従連衡」の言葉の意味・その策の概略とを辞書・インターネット・資料集などを利用して調べる。知技(2)イ

〔学習のポイント〕1・〔言葉と表現〕1

❶多くの項目を調べなければならないが、多大な時間を費やすことができないので、グループでそれぞれの項目を分担し、辞書・インターネット・資料集で調べさせ、それをプリントなどにして発表させるのがよい。また、「戦国の七雄」の解説は、「先従隗始」のとき配布した「戦国時代」の概略プリントの中に記述されているのを用いてもよい。（「先従隗始」「解説ー戦国時代の概略ー」参照。）以下、それぞれの項目について、簡略にポイントのみを記す。プリント作成の参考にして欲しい。

○**春秋戦国時代の概略**

・**春秋時代**＝周室の支配力が次第に衰え、諸侯が覇者になり武力をもって天下に号令するようになり、列国が富強を争った時代。特に、「春秋の五覇」は有名。

・**戦国時代**＝周室の支配力は完全に衰え、諸侯の勢力が強大になり、全期間を通して群雄割拠の戦乱（弱肉強食・下剋上）の時代となり、「**戦国の七雄**」（燕・斉・趙・韓・魏・秦・楚）が争う世となった。「戦国の七雄」はそれぞれが改革を行い、国力を充実させて周囲の小国を併呑し、勢力を拡大していく。また、この時代は、農業や工業が発展し、文化的にも「諸子百家」が活躍し、多くの思想が花開いた。

・**諸子百家**＝春秋時代の末から戦国時代にかけて、周王朝の権威が衰え、言論思想の発表が自由になると、多くの思想家が現れ、いろいろな学説を発表した。最も古いのは儒家で、仁を説く孔子に始まり、孟子・荀子らによって継承され、支配階層の政治道徳として発展していった。また、博愛主義を説く墨家、無為自然を尊ぶ道家（老子・荘子など）、刑名法術により天下を治めようとする法家（韓非子・李斯など）、一種の論理学派といえる名家、政治的な外交政略を説く縦横家、さらには農家・雑家・小説家などの、多数の学派があった。（詳細は、「学習のポイントの解答例」❶参照）

【評価】「春秋戦国時代」「戦国の七雄」「諸子百家」の概略と「合従連衡」の言葉の意味・その策の概略などの、歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「鶏口牛後」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。〔**言葉と表現**　1〕
❹現代語訳をする。知技(2)ウ
❺内容読解をする。

❶範読はゆっくり丁寧に読む。
【注意させる読みの箇所】「求レ割レ地。」「不レ用。」「従親」「至レ趙。」「莫レ若二六国従親、以退擯一レ秦。」「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。」
❷大きな声で読むよう指導する。
❸辞書で調べた「鶏口牛後」の意味を参考に、要旨をノートにまとめ、発表させる（五十字程度）。黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。
❹生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。
【注意すべき句形】「不レ用。」（受身）「説…、従親。」（使役）「…至レ趙。…約二諸侯一。」（使役）「西向」（仮定）「莫レ若…」（比較）「寧～無レ…」（選択）
【注意すべき語句】「求レ割レ地。」「従親」「卒」「従合」
【評価】【注意すべき語句】【注意すべき句形】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。
❺次の**ア**～**ウ**のポイントに注意する。**ア**「遊説」とは、どのようなことをするのか、**イ**「西向」とは、具体的にどのようにすることか、**ウ**「鶏口」と「牛後」が指す具体的な内容。それぞれグループで話し合い、代表者が発表してもよい。
ア…「遊説」の意味を辞書やインターネットで調べ、説明させる。その際、この行為の主体は、「諸子」で、その「諸子」が自説を諸侯に説いて回り、大いに活躍していたことにも気づかせたい。まさに「百家争鳴」の時代であったことを表現する言葉なのだ。
イ…「P一三六『戦国時代要図』を参考にして、六国の西の方向に、何という国があるか。蘇秦は、その国と六国がどのような関係にあった方がよいと考えているか。『向』の意味に注意する。」という助言を与えるのはよい。
ウ…本文に即して、グループで丁寧に吟味させる。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶ 蘇秦の説得の巧みさはどこにあるかをグループで話し合い、代表が発表する。思判表B⑴ア 主態〔「言語活動」1〕

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループからの質問を受け、それに対する返答のための検討をする。また、返答の仕方も工夫する。

❸「寧ろ」を用いた短文を作り、グループ内で発表し合う。知技⑴ウ〔「言葉と表現」2〕

❹ まとめの朗読をする。

❶「次に述べる二点から、蘇秦の説得の巧みさを話し合ってみよう。①六国の諸侯たちのどのような気持ちを利用したところに巧みさがあるか。②六国の諸侯たちのどのような時代気風・時代風潮を利用したところに巧みさがあるか。」という助言を与え、グループで話し合わせる。

【評価】・蘇秦の説得の巧みさについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、話し合いの観察などにより確認する。・蘇秦の説得の巧みさついて、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷ 他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という注意を与える。生徒が考えを深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという「言語活動」が大事となる。

❸ グループ内で、それぞれが作った「寧ろ」を用いた短文を発表させる。

(例)「彼は天才というより寧ろ努力家だ。」「そんなものは寧ろないほうがましだ。」など。

【評価】 本文の例を意識して「寧ろ」を用いた短文を作り、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

❹ 大きな声で各文の意味を考えながら、音読させる。

発問例

●一三六ページ

問　**「秦人」（２行目）は、単なる「秦の人」もしくは「秦人」と称する人がいたのではない。ここでは、実際には何を意味しているか。**

答　「秦王」もしくは「秦国」。

補　語注「１秦人」を確認させる。

問　**「求レ割レ地」（３行目）とは、どのような意味か。**

答　領土（の一部）を割譲することを要求する。

問　**「遊説」（４行目）について、**

①　**どのようなことをするのか。**

②　**「遊」「説」のそれぞれの意味、及び「遊説」で認められるとどうなるのか。**

答　①諸国を巡って、諸侯に自分の意見・政策の正当性を説得する。

②「遊」は旅行の意で、他国に出かけて行くこと。

「説」は人に自分の意見を説いて従わせること。

諸侯に意見を説いて採用されると、衣食の費用が給せられ、また仕官がかなうなど、立身出世して富貴になることもあった。

補　①「遊説」という行為が自説を「説く」と「喝」は「嚇」（おどす）と同じで、「脅嚇」ともいう。

語句の研究

●一三六ページ

2秦人　ここでは秦王の意。戦国時代（「先従レ隗始」「解説」Ⅰ参照）中期、秦の孝公（前三六一年～前三三八年在位）は、法家の商鞅（しょうおう）を登用すると、彼の改革政策と信賞必罰による厳格な法治主義を用いて、富国強兵の実をあげ、強力な中央集権体制を確立した。このように国力が増大すると、戦国の七雄（「先従レ隗始」「解説」Ⅰ参照）随一の強国となり勢力を誇った。この孝公を継いだのが恵王（後出「秦恵王」参照）で、そのときに蘇秦は活躍するのである。

「秦」は現在の甘粛省、陝西（せんせい）省西部にまたがった地域に居住した西戎（せいじゅう）出身の遊牧民で、西方に偏在したため東方諸国からは野蛮な国と見られていた。そのため、侮蔑の意味を込めて「王」と記さず「人」として軽んじたのである。また、ここを「秦の国」とも考えられる。それは国名の次にくる「人」は「ヒト」と読み、「…の国・…の国の人」とするからである。

2恐喝　おどす。ここは軍事力で脅迫し威圧すること。「恐」は「脅」（おどしつける）、「喝」は「嚇」（おどす）と同じで、「脅嚇」ともいう。

2諸侯　もと周王朝の封建制のもとで設けられた「公・侯・伯・子・男」という五階級の第二番目の爵位。ここでは、秦に圧迫された六国（燕・趙・韓・魏・斉・楚）のこと。

3割レ地　領土の一部を割き譲り与える、割譲すること。「割」はわる・さく。「地」は領土・国土。

3洛陽　地名。東周の都。現在の河南省洛陽市。洛水（陝西省に発し洛陽の辺りを過ぎて黄河に注ぐ川）の陽（北岸）に位置しているのでいう。（太陽の光を受ける所が陽で、受けない所が陰である。川の場合、北側が陽、南側が陰。山の場合、南側が陽、北側が陰。陽はひなた、陰はひかげ。）周代は洛邑といい、武王がここを東都とし、周の平王の東遷（前七〇年）後、都となった。

4蘇秦　生年未詳～前三一七年。戦国時代の遊説家。「史記」蘇秦列伝によると、「初め鬼谷先生を師とし、権謀術数や雄弁の術を学んで数年間天下を遊説した。しかし、その策は用いられず、困窮して家に帰り、妻・兄嫁などに嘲笑され発奮し、部屋に閉じこもって書を読み、「周書陰符」（兵書）

いう意味と同時に、「諸子百家」が自説を諸侯に「説得」して回り、大いに活躍していたという時代風潮を暗示していることにも気づかせたい。

問 **[従親(ジュウシン)]（6行目）について、**
[中]具体的にはどうすることか。
[中]その目的は何か。

答 2 1
1（燕・趙（・斉・楚・韓・魏）を）南北に同盟させること。
2同盟を結んで大国秦に対抗すること。

問 **「資レ之」（6行目）とはどういうことか。**

答 燕の文侯が蘇秦の合従策に賛成し、趙の粛侯と交渉させるための旅費や遊説に必要な資金を与えたこと。

補 語注「8資之」を確認させる。

問 **「西向(ニシカバ)」（9行目）について、**
[中]具体的にどのようにすることか。
[難]なぜ「西」という方角が示してあるのか。

答 2 1
1西の秦に立ち向かうこと。（西の秦に敵対すること。）
2秦の国は函谷関以西にあり、六国側から見ると西の方向にあるから。

補 1「六国の西の方向にどの国があるか。蘇秦は六国はどのような関係にあったほうがよいと言っているか。」というヒントを与えるのはよい。

問 **「計(ルニ)」（10行目）の「計」の意味を次の中から、揣摩(シマ)の術（他人の気持ちを推し量り、我が嚢中に導入する術）を案出し、再び天下を遊説した。まず、周の顕王に国家経営の策を、次に秦の恵王に富国強兵の策を説いたが用いられなかった。そこで、趙に行き、合従の策を説くがまた用いられず、燕に行き、一年余りたって文侯に会い、合従の策を説いて用いられた。そこで文侯から金品の援助を受けて、再び趙の粛侯に合従して秦にあたるべきことを説いた。この策を受け入れた粛侯の後援のもとに、韓・魏・斉・楚に説き、六国を合従させることに成功した（前三三年）」とある。

4遊説　諸国を巡って、諸侯に自分の意見・政策の正当性を説得する。「遊」は修学・見物・仕官のため他国に出ていく。「説」は人に説いて自分の意見に従わせる。この場合、訓読の伝統として、音は「ゼイ」。

4秦恵王　前三三七年～前三一〇年在位。秦の孝公（前出「秦人」参照）の子。即位してまもなく孝公を補佐した商鞅を謀反の罪で誅した。即位後十三年（前三五年）で、秦は従来の「公」の称号をすてて「王」を称した。これより二年後、韓・燕も「王」を僭称し、全く天下は乱れた。「戦国策」秦策に詳しい。

5不レ用　「史記」蘇秦列伝によると、「秦ではちょうど商鞅を処刑したばかりのときで、遊説の士を憎み、蘇秦を任用しなかった。」とある。「用」は有能なるものとして登用する。ここの主語は、蘇秦なので文脈上から受身に読む。「ら」は受身の助動詞「る」の未然形（後出「句法」参照）。

5乃　そこで。時間の経過を表す。

5説二燕文侯一、与レ趙従親　ここは、使役を暗示する動詞「説」があるので、下の句を「従親せしむ」と使役に読む。「説」の主語は蘇秦（後出「句法」参照）。「与」は、返読文字。「と」と読む。並列と従属の意味がある。ここは、Withの意味を表す。いわゆる従属の用法。「燕」は、戦国の七雄の一つ。現在の河北省地方にあり、薊(ケイ)（現在の北京市の北西）に都があった。西周創業の功臣である召公奭(セキ)（成王を周公旦とともに補佐する。人望が厚かったので召伯ともいう。）が封ぜられた国。「燕文侯」は、前三六一年～前三三三年在位。桓公の子で、文公ともいう。「趙」は戦国の七雄の一つ。晋を権臣の趙氏が韓氏・魏氏とともに三分して建てた国。現在の山西省東部・河北省

ら選べ。

(ア)計算する　(イ)決算する　(ウ)計画する
(エ)計上する　(オ)処置する

答　(ウ)

●二三七ページ

問　**「莫レ若」（1行目）は「A莫レ若B」という比較形で、次のような意味である。本文ではAに該当する言葉が省略されているが、A・Bに該当する内容は何か。**

（　A　）よりも（　B　）にまさるものはない。

答　A趙一国の力で大国秦に対抗する
B六国が南北に同盟して秦に対抗し、秦を退ける

問　**「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。」（2行目）について、**

1 **[中]「寧」の用法・意味は何か。**
2 **[中]「鶏口」「牛後」の元来の意味（原義）は何か。**
3 **[難]「鶏口」「牛後」は、それぞれ、何を例えたものか。**
4 **[難]言葉で蘇秦が言いたかったのは具体的にどのようなことか。**
5 **[難]この言葉は、「鶏口」と「牛後」の本来的な意味の際立った対比において強い説得力を発揮した。どのような意味の対比か。**

答　1選択・比較を表す副詞。「どちらかと言

南部・河南省黄河以北の地で、邯鄲（現在の河北省邯鄲市）に都した。「従親」は「従に親しむ」の意で、南北に同盟を結ぶこと。「従」は「縦」と同じでたてに伸びた線、南北のこと。ここの、北方の燕と南方の趙とが同盟するということは六国が同盟して秦に対抗することをいう。「従合」・「合従」ともいう。「合従」の対は「連衡（横）」。張儀の説。六国が東西（横）に連なって秦に仕える。

6 資レ之　「資」は、金品などを与えて援助する。ここでは、遊説の資金を与えること。主語は燕王。「史記」蘇秦列伝には、「蘇秦に車馬金帛を資し以て趙に至らしむ」とある。

7 粛侯　趙の第五代の王。前三四九年～前三二四年在位。成王の子。

8 諸侯之卒　六国の諸侯の兵士。「卒」は下級の兵士。

9 西向　「西」は秦のこと。秦は、現在の陝西省の地にあたり、函谷関以西にあった。そのため六国からみると西方であるから「西」という。「向」は、立ち向かう、刃向かう、敵対するの意。

10 必破矣　「矣」は、断定・強調の語気を表す文末の助字。

●二三七ページ

1 莫レ若二六国従親一、以擯レ秦　「莫若…」は、「…に若くは莫し」と読み、「…にまさるものはない・…に及ぶものはない」の意。「若」は及ぶ。優劣を比較し最上のものを取り出すときの句法。最上級の比較の表現。「六国」は燕・趙・韓・魏・斉・楚。「擯」は、（押し出して）のけ者にする。しりぞける、擯斥する。「斥」・「棄」と同じ。

2 鄙諺　世間で言い習わされていることわざ。ここでは次に出てくる「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一」を指す。

2 寧為二鶏口一、無レ為二牛後一　「寧…」は、「どちらかと言えば…のほうが望ましい」の意。二つの事柄を比較して、その一つを選択する表現。「鶏・牛」は大・小、「口・後」は貴・賤の比喩で、「鶏口」は小国（六国それぞれ）の君主を例え、「牛後」は大国（秦）の臣下を例える。「史記正義」には「鶏口は小なりと雖も、猶ほ食を進む。牛後は大なりと雖も、乃ち糞を出だすなり。」とある。小国の君主になるのはよいが、大国の臣下にはなるなという意から、後世は一般に「独立を重んじよ」という意味に用いられる。

えば…のほうが望ましい」の意。
[2]「鶏口」＝鶏のくちばし。
「牛後」＝牛の尻または牛の尻の穴。
[3]「鶏口」＝小さくても独立した国の君主。
「牛後」＝大国秦などの臣下。
[4]小国の王となっても、大国の家臣になってはならないということ。
[5]「鶏口」は、小さくても「きれい」で「独立」かつ「誇り」あるもの、「牛後」は、大きくても「汚い」もので、「束縛」された「屈辱的」なもの、という対比。

問 [1] **[於レ是六国従合。]（3行目）について、[中]「従合」と同義の語を本文中より二例あげよ。**

[2] **[中]「六国従合」までの蘇秦の遊説順を次の図で示せ。**

〈秦〉→（　①　）→（　②　）→〔韓・魏・斉・楚〕

答 [1]合従・従親
[2]①燕　②趙

問 **「合従策」が成立した理由としてどのようなことが考えられるか、次の二点を基にして述べよ。**
(1)当時の六国と秦との関係
(2)当時の各国の君主の時代精神

答 (1)「秦人恐ヨ喝諸侯ヘ、求レ割レ地。」とあることから、超大国の秦から六国はおどされ、領土の割譲を求められ、圧迫されており、六国は更なる圧迫・侵略を恐れ、それから逃れる最良の方策として合従策を受け入れた。
(2)蘇秦が用いた「寧為ニ鶏口一、無レ為ニ牛後一。」ということわざには六国の君主それぞれが持っていた、当時の時代精神ともいうべき自尊心・独立心・名誉心をくすぐり強調する効果があり、それによって「合従策」が君主たちの納得・賛同を得ることができた。

問 **蘇秦のような遊説家が活躍したのはどのような時代であったか、簡潔にまとめなさい。**

答 個人も国家も実力のみを頼りとする戦国の乱世であり、群雄割拠。人もまた、雄弁詭弁で世を渡ることの可能な時代であった。

一説に、「後」は「后」の意で尻の穴の意ともいわれる。また、「戦国策」の「寧為ニ鶏尸一、不レ為ニ牛従一。」の注の「尸鶏中主也。従謂ニ牛子一。」を引いて、「鶏仲間の大将になってもよいから、親牛の後にぞろぞろついて行く子牛にはなるな。」という解釈もある（「史記索隠」）。この解釈に従っても、蘇秦の意図は同じである。

3 於レ是　こうして。そこで。「ここニおイテ」と読む。

3 六国従合　「従親」と同じ。趙の粛侯の援助を受けた蘇秦は鄙諺を用いて諸侯を遊説し、その結果、前三三三年、六国の従合が成立した。

キー・ポイント　時代を表す言葉　「遊説」「説」「従合」などは戦国時代を表現する言葉である。「遊説」「説」は「戦国の説客」（後出「解説」**I**参照）が諸侯を巡り訪ねて積極的に自説を説いたことを表現したもので、説客の活躍を示している。ここでは、「説」を繰り返し用いることによって諸侯に合従策を説く過程を「略」し、さらに文章にスピード感を持たせようとした。「従合」は「合従」のことで、歴史上、その時代だけに存在した外交策を述べた言葉。

句法

不レ用　受身形。文脈から受身に読む。その場合、文語で受身を表す「る・らる」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

説二燕文侯一、与レ趙従親　使役形。使役を暗示する「説・命・挙」などの動詞が上にきた場合、下の動詞を使役に読む。その場合、文語で使役を表す「しむ」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

燕資レ之、以至レ趙。…粛侯乃資レ之、以約二諸侯一　使役形。ここは前後の文脈から判断して、使役に読む。その場合、文語で使役を表す「しむ」という助動詞を接続させて訓読する。また、同文の「資」という動詞との関連で使役に読むと考えてもよい。

西向　仮定形。ここは前後の文脈から判断して、仮定に読む。その場合、「未然形＋ば」（「ば」は接続助詞）の形を用いる。

莫レ若二六国従親、以擯レ秦　比較形。「莫若…」は「…ニシクハナシ」と読み、「…にまさるものはない・…に及ぶものはない」という意味で、最上級の比較の表現。「莫」が「無」の場合でも同じ。

寧為二鶏口一、無レ為二牛後一　選択形。「寧〜無レ…」は「むしロ〜トモ…なカレ」と読み、「どちらかといえば〜しても…するな」の意。二つのことを比較して、その一つを選ぶ。

解説

I　戦国時代の概略

戦国時代になると、鉄製農具の相当な普及と農業技術の進歩による生産力の著しい増大、さらに、大規模な治水や灌漑工事、これらによって広大な土地が新たに開墾されるようになった。それまで氏族制の下で公田耕作という名の奴隷労働に従事していた農民たちは、氏族の束縛を離れてこの新しく開墾した土地を私有あるいは租借して耕作し始めたのである。その結果、諸侯は公田を開放したり、大夫などの私有財産を大幅に認めざるを得なくなってしまった。それは、諸侯・卿・大夫・士という封建的な身分秩序が崩壊していくことを意味するのと同時に、上も下も互いに利を求め激しく争い合う下剋上の世の中になっていくことも意味している。春秋時代から進んでいたこの弱肉強食の時代傾向は、この時代になるとさらに激しさを増し、諸侯の中にはその実権を大夫などに奪われる者もあった。春秋時代には、まだ西周の名目的な権威が残っており覇者の主宰する会議によって一応の秩序は保たれていたが、独立国の実質を備えた国はそれでも十四を数えた。諸侯を統率する覇者がなくなり、完全に力と力の闘いとなった戦国時代には、燕・趙・韓・魏・斉・楚・秦のいわゆる「戦国の七雄」と、僅かに生存する宋・魯・衛などの弱小国のみに淘汰され、西周はただ洛陽付近を領する一諸侯に成り下がってしまった。そして、これら生き残った諸侯たちは、他国との侵略戦争に勝つために富国強兵と中央集権の確立の必要性に迫られ、そのため、氏族制に固執する旧勢力の排除と、新開墾地ばかりでなく卿・大夫

の領地までも直轄地に組み入れていくこととなった。また、農民の支配形態も、氏族を媒体とするものから、「法」による直接的、画一的な統治へと変化した。

このような時代の変化は政治上では、君権の強化を目的とする諸侯と、世襲の特権を温存しながら自己の実力強化を図る貴族勢力との対立として現れ、しばしば内紛へと発展していった。

そこで、諸侯はこれらを制圧し強力な中央集権を確立するために自らの手足となって働く官僚を重用し、国内を直接統治する郡県制度を導入するなどの行政制度の整備に努めた。この新勢力の中心となった官僚の多くは世襲貴族ではなく、支配階級の最下層にあった「士」階級に属する人々であった。彼らは自国の君主だけでなく、自分を認め登用してくれる君主があれば遠い他国へも出かけていった。これがいわゆる「戦国の説客」たちであり、その中から「諸子百家」と呼ばれるさまざまな思想家たちが生まれ活躍した。「史記」はその主なものを六つに分類している。

儒家（孔子・孟子・荀子）、墨家（墨翟）、道家（老子・荘子・列子）、法家（管仲・韓非）、名家（恵施・公孫竜）、陰陽家（鄒衍）、

このほか縦横家（蘇秦・張儀）、農家（許行）、兵家（孫子・呉子・楽毅）、雑家、小説家などがある。

戦国時代という名称は、戦乱が続いたから、あるいは、この時代の十二の諸国の事跡や遊説の士の言説・外交の駆け引きなどの大半を国別に記した「戦国策」という書名によるものとする。

Ⅱ　合従連衡について

兼併簒奪の戦国時代では、外交策や謀略を諸侯に遊説する縦横家が活躍した。そこには、兵士の殺し合いの戦いばかりでなく、外交・謀略による戦いも激しさを増してきたという背景が考えられる。特に、秦が超大国となったため、秦を中心とした外交策が各国にとって重要となっていった。当時、外交と謀略に長けた鬼谷子という人物がいて、その弟子に二人の秀才がいた。蘇秦（生年未詳〜前三一七年）と張儀（生年未詳〜前三〇九年）である。蘇秦は西方の秦が超大国であったので、東方の六国（燕・趙・韓・魏・斉・楚）が連合し、同盟を結びそれに対抗するという外交策、「合従策」を提唱した。従は縦で「合縦」とも書き、六国を南北（縦）に合わせたためこのようにいう（合従策は前三三三年に成立した）。合従策は秦の侵略を防ぐための防波堤となり、十五年もの間、秦は函谷関の東に兵を進めることができなかった。この合従策を嫌った秦は六国の一角を崩す策略を巡らし解体させようとした。そこで、趙をだまして合従から離間させることにした。それが成功すると、斉と魏が離間した趙を伐つこととなり、さらに斉は燕をも攻めた。もともと合従策は利害の異なる六国が結んだ条約なので、これによって六国に亀裂が生じると同盟国はたちまち互いの猜疑心によって崩壊の一途をたどることになる。斉・魏に攻められた趙に住んでいた蘇秦は、身の危険を感じて趙を去り燕に身をおくが、燕の易王の母と密通してしまいその咎を逃れるため今度は斉に亡命する。そこで、暗殺者の手に倒れることとなる。ここに、「合従策」は音を立てて瓦解することとなった。この策に対抗したのが、蘇秦と同門の張儀の、「連衡策」であった。あるとき、楚に遊説に行った張儀は宰相から璧を盗んだ嫌疑をかけられ恥辱を受ける。失意に沈む張儀を蘇秦は援助して秦に

仕えさせた。それを知った張儀は感激し「蘇秦が従合の長である限り行動は起こさない」と言った。蘇秦が趙を去り合従が解けると、張儀がこのときとばかりに、全力を注ぎ、以前にも増して激しい切り崩しを行った。六国中、最大の力を持つのが楚で、次は斉である。この二国の断交こそが「連衡策」成立の最大のポイントと考えた。張儀は、楚の大臣を抱き込むと親秦派を扶植し、合従派（特に斉との同盟を主張する親斉派）を没落させた。そして、斉を攻めさせ、仲違いをさせることに成功する。この親斉派の中に有名な屈原がいて、この現状を憂えて汨羅に身を投げたのはあまりにも有名である。次に秦は韓・趙と一国ずつ和親条約を結び、次にそれぞれの国との連衡を成立させた（前三一二年）。連衡は横に連ねる意で、六国がそれぞれ秦と東西（横）に同盟してそれぞれの諸侯が自国の安全をはかろうとした外交策である。このようにして張儀は秦の宰相となり、連衡を説き活躍したが、秦の恵王が死に、太子の頃から張儀を嫌っていた武王が即位すると失脚し位は退けられ、魏に逃れ宰相となったが一年にして没した。この策によっても六国は生き延びることができず、ついに秦によって、前二二一年の斉の滅亡を最後にして六国全てが併合され、統一が完成するのである。

Ⅲ　蘇秦の人間観について

この「鶏口牛後」の話は、「合従連衡」の言葉とともに馴染み深い史話である。この教材の後には、次のような後日談が記されている。そこには蘇秦の人間観が描かれており、おもしろい内容なのでここに記すこととする。「六国共通の宰相となって家に立ち寄った蘇秦は、家族から以前の冷遇のお詫びと功名や富貴を得るためにひたすら努力したことに対する称賛があるものと予期していた。ところが、家族は蘇秦の努力を評価せずに、現在の地位と名誉・金力といった現在そこにある外側だけの栄誉・権勢にのみ注意を注ぎ、それにひれ伏し媚びへつらい追従する。また、困窮していたときは冷淡で侮った態度で接し、富貴になったときには丁重な態度で接する。この臆面もなく態度を変える人間の情けなさ。ここに、蘇秦は人間の卑小さやあさましさを動かし難い現実として思い知らされる。これが人間だ、と。しかし、蘇秦は権謀術数を学んだ現実主義者、このような人間の実態など百も承知のはず。それが分かっていても喟然として歎息してしまう、これもまた人間か。」

参考

蘇秦については「史記」巻六十九「蘇秦列伝」や「戦国策」秦一に詳しい記述があるので参考にしてほしい。特に、「戦国策」には蘇秦が家族から冷淡な態度をとられ、発憤して学問に励んだ様子が次のように記述されている。「書を読みて眠らんと欲せば、錐を引きて自ら其の股を刺す。血流れて足に至る。曰はく、『安くんぞ人主に説きて、其の金玉錦繍を出させ卿相の尊を取る能はざる者有らんや。』と。」（読書をして眠くなると、錐を手元に引き寄せて己の股を刺した。その血が足まで流れた。痛さをこらえて言った、「どうして諸侯を説得して、その金玉錦繍の褒美を出させ公卿や宰相という尊い地位を自分のものとすることができないことがあろうか、いやできる。」と。）

ちなみに、明治十八年創業の、渦巻き型蚊取り線香でお馴染みの「金鳥」は、創業者・上山英一郎氏が「鶏口となるも牛後となる無かれ」を信条としていたため、鶏を形取ったものを会社のマークとしている。